

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	篠 村 恭 子
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>児童英語教育教員養成課程において大学生が理想とする 小学校外国語授業についてのビリーフとイメージの変容に関する質的研究</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 深 澤 清 治</p> <p>審査委員 教 授 築 道 和 明</p> <p>審査委員 教 授 松 浦 伸 和</p> <p>審査委員 教 授 松 見 法 男</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、小学校での外国語教育に携わる教員を育成する教員養成課程の講義を1年間受講した大学生がどのような学びを得るかを質的かつ縦断的に分析した研究である。</p> <p>第1章では、本論文の目的と論文構成を述べた。本研究の背景として、①2020年度からの小学校での外国語教育改革を受けて指導者の育成が急がれていることに加え、②教員養成課程での小学校外国語教育に関する学生の学びについての研究領域において、その実態が未だ十分に明らかとは言い難いことに言及し、本研究の必要性を述べた。</p> <p>第2章では、用語の定義と先行研究の概観を行った。第1節では、言語教師認知研究における「ビリーフ」と「イメージ」についてこれまでの研究で用いられている定義を概観し、本研究における定義を設定した。第2節では、先行研究をまとめ、授業に対するビリーフやイメージについては、教員養成課程での一定期間の縦断的な研究が不足していることを確認した。また、受講を通して得られる大学生の学びについては、他教科での研究事例は見られるものの日本における小学校外国語教育の領域についての先行研究はこれまでに未だほとんど行われていないことを指摘した。</p> <p>第3章では、第2章の先行研究を踏まえて以下の2点を研究課題として設定した。</p> <p>RQ①: 児童英語教員養成における大学生の理想の小学校外国語授業のビリーフとイメージはどのように変容するのか。</p> <p>RQ②: 児童英語教員養成における大学生は講義を通してどのような学びを得るのか。</p> <p>第4章では、調査対象や方法について記述した。講義を受講した大学生の内、「中学校英語科教員の免許状取得予定の有無」「自身の英語運用能力に対する自信の度合いの高低」を規準として、8名（4群各2名）の学生を分析対象として抽出した。6種類のデータ（①学習履歴調査／②ビリーフについての質問紙／③理想の小学校外国語授業についてのイメージの記述調査／④毎回の講義後の振り返りレポート／⑤指導案作成課題／⑥模擬授業と協議会の実施におけるビデオ記録）を、2016年度1年間を通して収集し、主に調査①（受講前）、調査②（前期末）、調査③（実習後）、調査④（後期末）の4時点でのデータを総合的に分析した。特に、データ②は8名の学生の回答の変化量を個別に分析し、データ③は4</p>			

回の調査での記述を SCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いてその変容を質的に分析した。

第 5 章では、結果の提示と考察を行った。第 1 節から第 8 節では、各抽出学生のビリーフとイメージの変容を個別に詳細に分析した。第 9 節では、第 8 節までの結果と考察を踏まえ、研究課題に即して総合的な考察とまとめを行った。

その結果、研究課題①に関するビリーフの変容については 7 つの変容の特徴 [①ビリーフの変容の個人差/②ビリーフの変容の共通点/③関連すると考えられたビリーフ間の関連性の有無や関連性の複雑さ/④ビリーフの形成/⑤ビリーフの「揺らぎ」/⑥ビリーフと実際の行動との乖離/⑦ビリーフが形成されない] と、6 つの変容の要因に関する特徴 [①英語の運用能力に対する自信の度合い/②教育実習での経験の影響/③「学級担任としての視点」「子どもの学びの視点」の獲得/④模擬授業と協議会の影響/⑤実際の経験の不足の影響/⑥その他 (ビリーフ変容に関わる要因の多様性と複雑さ)] の計 13 項目の特徴が明らかになった。また、理想の授業イメージの変容に関しては、3 観点 7 項目の特徴 [①視点の広がりや新たな視点の獲得] (1-1. 外国語授業に関わる新たな観点の獲得/1-2. 学級担任として児童や外国語授業に関わる指導者としての視点/1-3. 児童の実態や子どもの学びに関する視点) [②言及される視点の質的変容や具体化] (2-1. 言及される視点の質的変容/2-2. 言及される視点の具体化) [③変容しない視点] (3-1. core value として変容しない/3-2. 変容の拒絶) があることが明らかになった。

研究課題②に関する学生の学びについては、3 観点 6 項目 [①シラバスで明示した講義のねらいに関する学び] (1-1. 学習内容についての再認識) [②振り返りを行ったことによる自身の成長についての気付きや成長したことで得られた更なる学び] (2-1. 自身の成長や変容についての学び/2-2. 指導者としての視点の獲得による学び/2-3. 学び続ける教師像の獲得) [③シラバスで明示した講義のねらい以外の付随的な学び: 講義の授業形態や調査者による授業運営からの学び] (3-1. 学び合いやシェアリングの重要性についての学び/3-2. 授業運営からの学び) があることが明らかとなった。

第 6 章では、第 5 章での結果と考察を踏まえて結論をまとめ、本研究の意義と今後の課題について述べた。

本研究の学術的意義、教育的意義は次の通りであると考えられる。

- ①先行研究の少ないとされる教員養成課程でのビリーフやイメージの変容に関する研究領域において、1 年間に渡り質的かつ縦断的に変容を調査したことにより、変容や変容の要因に関する特徴が明らかになり、今後の研究に対し新たな事例の提示となったこと
- ②教員養成課程での学生の学びについての特徴が明らかになったことにより、今後の学生の学びの質の向上や教員養成課程のカリキュラム改善に資すると考えられること

小学校外国語教育の領域において教員養成課程の質の向上は社会的にも研究的にも今後ますます必要となると考えられる。本研究は、日本の英語教育において重要な教育的示唆となり得るとともに、今後、同様の研究を行う上で重要な視点を提供するものである。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士 (教育学) の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 31 年 2 月 12 日